

絵本がつくる平和な社会の実現を目指して -- アフガニスタンにおける図書館活動（特集 開発途上国における図書館の役割と支援活動）

著者	市川 斉
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	126
ページ	21-23
発行年	2006-03
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005520

特集

特集／開発途上国における図書館の役割と支援活動

絵本がつくる平和な社会の実現を目指して—アフガニスタンにおける図書館活動

市川 齊

緊急救援活動から復興支援活動へ

二〇〇一年九月米国における同時多発テロ、そして一〇月からはじまった米英軍のアフガニスタンへの空爆。当時一〇〇万人以上が難民として海外に避難することが予想され、多くの国際機関、NGO（民間の国際協力団体）が緊急救援活動にのりだした。当会も、難民の人々、特に、子ども、女性など、弱い立場の人々が困難な状況に追い込まれることを危惧し、緊急救援活動として食糧配布を実施した。その中で垣間見たものは、二〇年以上にわたる内戦・戦乱の影響でまさに破壊され尽くした国土、そして、苦境の中で生きる人々である。

同年一二月タリバン政権崩壊後の暫定行政機構が発足した。国家再建において教育は重要であるものの、校舎の多くが破壊され、教材はなく、ゼロからの再建であった。しかし、野外における授業で地元の人が教員として教鞭をとり、黒板しかない教室で子どもたちが希望を持ち、授業を受けていた。そんな状況を座視することなく、当会

は、二〇余年にわたり東南アジアにおける教育支援活動に関わった経験を生かし、アフガニスタンの人々を共に応援できる活動を模索するために、二〇〇三年から復興支援活動を開始した。私は、その責任者として、現地へ赴任し、初等教育改善のために、学校建設事業と図書館活動に取り組んだ。以下、図書館活動を取り巻く状況、当会の活動とその課題を述べていきたい。

本がない中での図書館活動

当会アフガニスタン人スタッフの独自の調査では、アフガニスタンにおいては、三〇年以上前には、国内の出版社によって子ども向けの雑誌が出版され、都市部で販売されていたが、ソ連の侵攻、内戦により、その後出版されなくなった。また、一九九〇年代後半のタリバン政権時代は、宗教書とごく一部の文化書を除き出版は禁止され、特に絵は偶像にあたるとして、絵本は焼却処分されたという。一方、公立図書館を管轄する情報文化省も、過去の資料の整理が十分でなく、アフガニスタンにおける図書館の状況については、把握していない。

また、首都カブールの街には、本屋が何軒かあるものの、英語やベルシヤ語の本がほとんどであり、母国語で書かれた子ども用の本を探すことはできなかった。

NGOによる出版活動

一方、商業ベースでなく、NGOによる母国語の絵本や雑誌の出版が徐々にではあるが実施されている。例えば、イギリスの放送局BBCが実施するアフガン教育プロジェクトにおいて、母国語であるダリ語、パシトゥン語で二二タイトルの絵本を出版した。また、フランス系のNGOのAINAが、子ども用の雑誌『PARVAZ』を出版している。また、数は限られているものの、NGOによって単発で現地語の絵本が出版されている。

一方、各州には公立図書館があり、当会が活動するナンガハール州の州都ジャラバードには情報文化局に併設されている。蔵書数は二〇〇〇冊で子どもの本はない。貸し出しはせず閲覧のみで、主な利用者は大学生だという。図書館というより本が置いてある物置といった感じで、窓がない



クズマリナ小学校での青空学級の様子
(2004年1月13日、筆者撮影)

●ゼロからの出発—絵本出版と収集

め暗く、非常に利用しづらい感じであった。そのような中で、当会の図書館活動を開始した。日本での図書館活動であれば、良書を選び、分類して、配架となるが、ここでは、図書が皆無だから、まずは隣国から絵本を収集した。イラン、パキスタンの絵本を集めて、それにパシウトウン語(当会の活動地域は、パシウトウン語が公用語である)の訳文を添付して活用した。しかし、必ずしも同じ絵本が揃うとは限らず、絵本を買い足すたびに絵本が変わり、そのたびに訳文を新たに作り直した。また、同じイランでも、同じ絵本が使えらるとは限らない。例えば、当会のエリアは、ほとんどの人がスンニ派に属するが、絵本でもスンニ派とシーア派の両派に使えるもの、そうでないものもあった。また、あるパキスタンの絵本は、女性の体の線がちよっとはつきり描写されているだけで教員には不評であり、絵本収集も当初からかなり苦労した。その一方で、自ら絵本出版も実施した。絵本がどれだけ受け入れられるのか未知数ということもあり、受け入れられる絵本を製作すること、アフガニスタンの人々の文化を尊重することも考慮し、この地域に伝わる民話から絵本を製作・出版することにした。そして、教員養成大学、教員、詩人、州教育局の推薦者からなる絵本出版図書選

考委員会を結成して、民話の選定や絵本の構成などを決定した。約二カ月間に七〇タイトルの民話を収集し、そこから五タイトルの作品を選んだ。そして、絵描き探し。画家がいないう中で、スタッフが目を付けたのが、街の看板屋。絵がうまそうな看板屋を見つけては、絵を描いてもらった。人間の絵を描けても、動物の表情を描くのは、とても難しいようであった。そして、最後の難関が、印刷である。当初、地元印刷会社に仕事を任せただけのもの、絵本の綴じや校正がまったく素人であり、結局、国境を越えたパキスタン・ペシャワールでの印刷となった。

●コミュニティ文庫の開始

本の収集、出版と共に、コミュニティ文庫を民家の一室で開設した。当初の活動予定にはなかったが、イスラム圏の子どもの絵本の好みを探るためには、子どもが気軽に立ち寄って絵本に接する場がないとその傾向がわからないことから、急ぎよ活動の中に取り入れた。当初は、絵本を中心に約三〇〇冊の蔵書でスタート。日本の民間ベースで行われている地域文庫に比べても小規模だが、パシウトウン語の絵本が皆無の中で、この文庫は、ナンガハール州唯一の子ども図書館といっても良い。また、図書の閲覧、おはなしや読み聞かせだけでなく、識字学級、絵画、ペーパークラフトなどの講座もあり、児童館の役割も併せ持つ

図書館である。週五日、昼休みを除き、午前九時から午後三時まで開館している。

しかし、この地域自体が保守的、伝統的な地域であり、外国人が前面にできることを良しとしないため、他の国で実施しているような野外での読み聞かせは不可能であった。地域のコミュニティの了解をとっているものの、本の存在が身近でなく、このような場をもつことは、開館当初から前途多難だった。まずは、文化的な問題。民家の一室でスタートしたが、男女が一緒に座るといふことで親(特に、女子の親)がとても心配し、文庫に子どもを行かせないこともあった。また、行政の理解を得るのも一苦労。行政関係者から見れば、教育支援をするなら、学校建設とハード面の支援を好む傾向があり、図書館活動の重要性をなかなか理解してもらえない。時には、コミュニティ文庫を閉鎖するように言及されることはあったが、最終的には、教育省で承認された移動図書箱活動(後述)のセンターという位置づけで了解をとりつけた。

一方、もっとも心配だったのは、安全の確保である。外国のNGOに対する自爆テロ、スタッフの誘拐事件の噂は日常茶飯事であり、広報を控えて、口コミだけで子どもが集まってくるようにした。二四時間の警備スタッフを配備し、看板を外し、治安の悪化の際には、臨時休業とした。また、復興に伴い交通量も増大し交通事故や子ども誘拐事件(誘拐した子どもの臓器売買の



チャキノール小学校における移動図書館活動で絵本の読み聞かせを楽しむ子供たち（2005年2月21日、筆者撮影）

ビジネスがあるとも伝え聞く）もあり、親としての心配はつきないが、連日、一〇〇人以上の子どもが通ってきている。

●図書箱抱えて学校へ―移動図書館活動の誕生

当初、教員ワークショップを通して、絵本の配布をする予定だったが、それだけでは、活動が十分に根づかないことが予想された。そのため、絵本を図書箱に詰めて巡回して読み聞かせをする移動図書館活動を急ぎよスタートさせた。東南アジアでの当会の活動のビデオを見せ、日本人専門家を招聘してワークショップを行ったが、当初は、当会のアフガニスタン人スタッフは、読み聞かせについては消極的だった。その理由は、アフガニスタンでは、大人が子どもの前で感情移入をして読み聞かせすることとは、文化上受け入れがたく、むしろ違和感があるようだった。よって、初めのうちは、威厳を持ちながら読み聞かせをしていて、子どもも緊張して聞いているというような雰囲気も見られた。しかし、半年後くらいから変化が見られ、スタッフが感情を込めた読み聞かせに、子どもが見事に呼応し、おはなしの世界に引き込まれ、ひとつのハーモニーを奏でていた。

●大切なのは、教える教員の気持ち―教員ワークショップの実施

移動図書館活動では学校を中心に巡回す

るが、読み聞かせをみて、戸惑う教員も多かった。中には、「子どもたちが読み聞かせで笑っていたけど、明日、俺の授業で笑ったらどうするんだ」と、子どもたちの表情の変化に戸惑い、校長に真顔で直訴する教員もいた。教員も本に触れたことがほとんどないから、トレーニングも必要である。そこで、教員対象のワークショップを実施した。図書館活動の理論と実践を学び、紙芝居作りも行った。しかし、絵を描く際に、「イスラムに反するから、絵を描かない」と発言する教員もいた。本来であれば、絵本の絵と偶像是違うものであるが、宗教的な論争は避け、教育活動として図書館活動を理解してもらうよう心がけた。

●第二段階を迎えた当会の図書館活動

このように、紆余曲折しながらも、活動が続けてきたが、二〇〇三年から三年間で、図書館活動が根づいていったのが一番の収穫だろう。子どもの生き生きとした表情をみて、地域の人や教員が図書館活動の意義を認め、徐々に理解を示すようになった。また、州の教育局、情報文化局も定期的に職員を派遣し、共同でつくる活動となったことは意義がある。

また、絵本は識字教材的な意味もあり、初等教育の質的な改善にも貢献している。ただ、課題も多い。コミュニティ文庫では、大人の読み物を揃えて、週五日のうち

一日は大人の目を設けて開放したが、子どもの図書館というイメージが強いためか、大人が足を運びにくくなっている。また、貧困にあえぎ学校すら行けずに食事に十分にありつけない子どもがコミュニティ文庫に通ってきているが、そのような子どもを対象にした事業も必要であるという思いもあり、スタッフの中では議論が付きまない。一方、最近では、絵本だけでなく読み物も取り揃えているが、母国語の図書の数も少ないため、文庫に通う子どもたちの多くは、すべての蔵書を読んでしまっており、図書の新規購入が間に合わないでいる。

●絵本一冊がつくる平和な社会を目指す

当会が運営するコミュニティ文庫は、子どもにとっても唯一とっていいくらい、安心して過ごせる場である。また、図書館活動を通じて、教員の意識が変わりつつあり、絵本が学校においての識字教材としての役割を果たすだけでなく、教員の意識変化（一方通行の授業から、子どもの主体性を尊重した授業へ）にも貢献している。

このような場を通して、戦争しか知らない子どもたちに夢や希望を与え、アフガニスタンにおける図書館活動は、平和構築を支える活動につながると信じている。

（いちかわ ひとし／社団法人シヤンテ
イ国際ボランティア会（SVA））